

教えは口伝された

インド最古の文献である『リグ・ヴェーダ』を初め、その後に成立した『ウパニシャッド』などの、いわゆるヴェーダ文献はシュルティといって天啓のものとしてされているので、文字に書き残すことがなく、口承して伝えられました。一般に口伝（くでん）といわれます。文字がなかったころはいうまでもありませんが、文字が作られてからも書き写されることは決してありませんでした。

とくに賛歌や祈とう文は、父から子へ、師から弟子へと、ごく身近な者へ、発音やアクセントや音韻などがそのまま伝えられ、学びとられてきました。

口伝の方法は紀元前5世紀ごろになると、「ストトラ」という方式に変わりました。「ストトラ」は一種の金言集であります。口伝されてきたものを簡潔なことばにまとめて、暗記し、唱えやすいようにしたものです。

これは単に単語を並べたようなものもあり、短句や短文であるために、説明や解釈を付け加えないと理解できないものが多いのです。したがって口伝される「ストトラ」では、父に就いて、師に就いて、長い間その意味を直接学びとるよりほかに方法はありませんでした。

書く技術、一般に通用する文字、印刷技術、印刷され保存できるような材料などがなかった時代では、暗記がもっともすぐれた伝承方法であったといえます。口伝する人がいなくなるかぎり、その知識は確実に保存され、伝承されます。

ヴェーダ文献が今日も古代インド人と同じ発音、アクセント、言い回し、音韻で人々に読み継がれているのは口伝に負うところが大きいのです。

文字に書き写されるようになって、インド人はヴェーダ文献を口伝しました。ここに

インド文化の希有性と歴史の重さを感じることができます。

お経は編集されたもの

仏教の文献も釈尊が亡くなってから 200 から 300 年間は口伝されました。釈尊が亡くなられたのが B.C. 383 年といわれますから、紀元前 1 世紀ころまで文字に表すことなく伝えられたこととなります。釈尊の 45 年間の伝道活動の中で数多くの教えが説かれました。それを多くの弟子たちは暗記していたのです。

釈尊が亡くなってから教えが廃れること、そしてさまざまな教えがあること、整合した教えが見えないこと、勝手に教えが弟子たちの間で作られることなど、種々の気掛かりなことがあり、高弟のマハーカッサパという弟子が釈尊の教えをまとめておく必要があると仲間の修行者たちに呼び掛けました。マガダ国の首都ラージャグリハの郊外で教えの編集会議が行われました。その時 500 人の修行者が集まったといわれます。

この編集会議をサンスクリット語でサンギーティといい、もとの意味は合奏、あるいは合唱といいますが、どうして音楽用語が使われているのでしょうか。それはこの編集会議そのものがその合奏、あるいは合唱に似ているからです。

所々方々で聞いた教えを各人が暗記しています。それらを持ち寄っています。それらを読み合わせると似ているものがあり、違ったものがあり、長いもの、短いものなど説法の内容や量に違いがあります。それらを突き合わせて、語句の整合、文体の調整などいろいろの点で編集を行った後、みんなでまとめられたお経を一緒に唱えるのです。

たとえばお寺で法要が行われる時、中心となるお坊さんがお経の冒頭の一句を唱えます

と、他のお坊さんたちが続きの経文を合唱します。これは音楽の合唱の時と同じではありませんか。この形式を踏んでお経が編纂されて、一つのストラが出来上がります。

このサンギーティを漢字で結集と訳しました。一般には「けっしゅう」と読みますが、仏教用語の読みは「けつじゅう」です。あるいは合誦とも訳され、「ごうじゅ」と読みます。これも一緒に唱えることです。

このストラは一つの形式を踏んでいます。というのは、釈尊の説法を聞いたものだから、それぞれのお経の内容は「私は次のように聞きました」ということから始まらないといけません。そこでここで合唱して出来上がったお経の冒頭には必ず「如是我聞。一時仏住・・・・」という文句があります。「次のように私は聞きました。ある期間、ブッダは・・・・に止どまっておられた。」という意味です。

そして末尾は一例として「聞仏所説。皆大歡喜。信受奉行。」というような文句で終わります。「ブッダが説かれたことを聞いて、みな大いに歡喜し、教えを信じ、記憶し、実践します。」という誓いの気持ちを表わしてお経は終わります。

ここに「皆大歡喜」という語句があります。これは多くの人々を代表して一人が釈尊に質問しているので、説法を聞いた後はその周りにいる人達も一緒に喜ぶのです。だからここにいる者たちは今の説法を忘れずに、毎日の生活の中で実行しますという誓いのこととなるのです。

このようにお経の最初と最後には手紙の拝啓と敬具という書き方の形式があるようにお経の形式が見られます。それはお経が釈尊の説法を聞いた人たちが持ち寄って編纂したものであるからです。もしお経が釈尊自身の執筆したものであれば、このような形式ではなかったでしょう。

要するにお経は釈尊の著作ではなく、説法の内容を編纂したものです。そしてこの編纂したお経を弟子たちは文字に書き表したのではなく、みな暗記して伝えました。ここのとことろを知っておいてください。

そしてお経は紀元前1世紀中ごろに第4

回の編纂会議が開かれて、この時初めて文字で表されました。その言語はパーリ語でした。釈尊の教えはこのパーリ語で書き表されたのですから、仏教徒はパーリ語を聖典語としました。パーリ語については後で詳しく説明しますので、ここではこれくらいにしておきます。

三蔵という文献群の成立

仏教の文献は実はお経だけでなく、ほかに戒律をまとめた文献もあります。すでに述べたようにマハーカッサパを中心にして編纂会議が開かれました。その折に、教えを中心にして編纂するグループと戒律を中心に編纂するグループがありました。前者のグループの責任者は釈尊のそばに二十数年間付き添い、もっとも多く教えを聞いたので多聞第一と呼ばれたアーナンダ尊者でした。

後者の責任者は修行者の中で戒律第一といわれたウパーリ尊者でした。戒律の律は仏教教団の中で修行する上の集団のきまりをいい、つまり集団の規則を律といいます。戒は個人の規律、規則をいいます。この二つを併せて戒律といっています。

このようにして教えをまとめたものを経蔵といい、戒律をまとめたものを律蔵といいます。蔵の原語はピタカといい、花籠という意味です。それぞれ摘みとった花が盛られた花籠のように経蔵は教えがぎっしり詰まった籠であり、律蔵は戒律が編み込まれた籠です。

修行者たちはこれら経蔵や律蔵を伝承するとともに、その内容について研究しました。その研究が盛んになり、多くの研究論文が発表されました。そのような教えの研究をアビダルマといい、それが盛んであった時代の仏教をアビダルマ仏教と呼んでいます。

この時代に著わされた多くの研究論文を編纂したものを論蔵といいます。つまり研究論文(アビダルマ)の花籠という意味です。

このように経蔵と律蔵と論蔵の三つを総称して三蔵といいます。三蔵が仏教文献のすべてを表わす用語と考えていいでしょう。たとえば玄奘三蔵法師という時の三蔵とは経蔵と律蔵と論蔵の三つをいい、法師とは説法師を

います。つまり玄奘という人は三蔵について熟知し、それらを自在に解釈し、説法できる人という意味です。

お経というのは正確にいうと三蔵の中で経蔵に収められている文献のことをいい、一般には仏教の文献を何でもお経と呼んでいるのは正しい使い方とはいえません。

「経」の意味

お経の経とはどういう意味でしょうか。「経」のサンスクリット語はスートラといい、糸、紐という意味があります。これを漢字で経と訳したのですが、古くは「線経」という訳もありました。線は細長い糸という意味があるので、スートラの原意を表す二つの言葉を使って「線経」と訳したのでしょう。「線経」は一般化せず、「経」の訳が多く使われてきました。

スートラのことばには動かないもの、不変の真理という意味があります。また、聖者の言葉を集めたものという意味にも使われるようになりました。そこで古くはいくつかのことばからなる短文の集まりで、宗教儀礼を規定する簡潔な教科書のことをスートラといいました。さらに文学や修辞学や医学や工学などの教科書にもスートラと呼ぶものが現われました。

このようにスートラは宗教の聖典だけでなく、科学の分野の書物にも見られたのですが、興味あるのは処世術や性典などにも書籍の題名にスートラがついているのがあります。ご存じと思いますが、『カーマ・スートラ』は男女の恋愛成就法などについての教科書で、これもスートラです。

私たちが使う「経」の原語はスートラですが、これは古代インドではさまざまな分野の教科書を表すことばであったことを知っておくべきです。

さて、仏教のスートラの原語を中国で経と訳したのはなぜでしょうか。当たり前のように考えますが、それなりの理由があったのです。

じつは経の漢字にもスートラと同じように縦糸、不動のもの、法、教えというような意

味があります。

中国では聖人の書物を「経」(けい)といっていました。経に対して「典」という言葉がありますが、これは古代の五人の帝が著した書物を指したようで、賢者の書物を「典」と考えていました。

仏教文献が中国にもたらされたとき、翻訳にあたった人たちは釈尊の教えを編纂したスートラを「典」ではなく「経」と訳したのです。これは当時の翻訳僧たちは釈尊を中国の古帝の堯、舜、禹、それに周公、孔子などと同じレベルの聖人と考えていたといえます。

仏教のスートラが「・・・経」と翻訳されたことは、外来の文献に対する最高の、真摯な態度と、翻訳に対する公平無私の学問的態度とが表されたのだと考えなければなりません。

お経の言葉はなにか

お経の編纂は釈尊が亡くなられてから 50 日経った頃に行われたことは先に述べました。その時は文字に書き写すことでなく、暗記してしまいました。その編纂した時のお経の言葉はなにかということが問題ですが、この編纂が行われた処がマガダ国の首都ラージャグリハであったので、そこの民衆の間で使われていたマガダ語で編纂されたのではないかと考えられています。

最初、マガダ語で伝えられたお経は編纂会議がその後 3 回、4 回と開かれる間に、西インド地方の古い民衆のことばであるパイシャーチー語の系統に属するパーリ語でまとめられるようになり、第 4 回の編纂会議ではこの言語で初めて文字に表されることになりました。この文字によって著わされたお経は紀元前 2 世紀以降、あるいは紀元前 1 世紀ごろに成立したといわれます。

このパーリ語が仏教のお経の言葉です。パーリ語はアショカ王時代 (B. C. 268~232 年在位) には西インド地方で民衆に親しまれた日常語であったといわれます。つまりお経は日常生活で使われていた会話語で著わされたのです。

一握りの修行者だけにしか知られなかった

お経を文字が読める人ならだれでも手に取って読むことができるようになりました。しかもこの民衆語で著わされた聖典は解りやすい、読みやすい、親しみやすいものであったはずです。

紀元 1 世紀を境にして仏教教団に大きな変化が見られました。それまで僧院に籠ってお経の研究だけに専念し、人々の苦しみや悩みに背を向けていた多くの修行者の生き方に対して、僧院をでて、釈尊のように庶民の中に溶け込み、直に庶民の苦しみや悩みを聞きとり、救済しようと誓った修行者たちが現われました。彼らの活動の一つは修行者の独占物であったお経を庶民に解放したことです。

文字が読める人はだれでもお経を手にして読むことも、書き写すこともできるようになりました。そしてそのような人々を相手にして修行者たちはお経を解説して回ったに違いありません。彼らのいわゆる辻説法によって多くの庶民は仏教へ関心を持ち、信仰を深めることができたと考えられます。

修行者の間で、パーリ語で著わされたお経をさらに増幅したり、書き替えたり、特徴のある教えを中心に書き表したり、出家しないでも救われる教えを説いたりした、いろいろのお経が作られました。

紀元 1 世紀を境にして、それまでのパーリ語のお経とはひと味もふた味も違った、創作されたお経が現われました。

じつはこのような創作されたお経はサンスクリット語で書かれたのです。サンスクリット語はパーリ語のような日常会話語ではなく、神のことばや詩歌を書き表すための言語でありました。

紀元 320 年頃に誕生したグプタ王朝が全インドを統一した時、サンスクリット語をインドの公用語にしました。そのために仏教のお経も韻文以外はサンスクリット語で書き表されるようになりました。

わが国の寺院で読まれているお経はもとサンスクリット語で書かれていて、中国で漢字に翻訳されたものです。それらはみな創作されたお経です。たとえば『法華経』『金剛般若経』『阿弥陀経』『般若心経』などのお経は皆創作されたお経で、サンスクリット語で書

かれています。

お経の言葉はこのようにパーリ語で書かれたものとサンスクリット語で書かれたものがあり、これらがチベットや中国、その他の国に伝えられて、その国の国語で翻訳されました。

お経はヤシの葉に書かれた

紀元前 1 世紀中ごろにストラは文字に書き表されたと述べました。その時、紙に書かれたのでしょうか。

最初、古代インドではブルジャ（樺）の樹皮に文字を書き写していたといわれます。ところがこの樹皮は保存が利かないためにあまり使用されなくなり、ヤシの葉がこれに代わりました。

ヤシの葉をサンスクリット語でターラパトラといいます。これを漢字で貝葉（ばいよう）、貝多羅葉（ばいたらよう）、多羅葉（たらよう）などと音訳しました。

貝はパトラの音訳で、葉はパトラの意識です。多羅はターラの音訳です。むかしは貝葉といえはお経のことでした。それほど貝葉は一般化した言葉でした。

横道にそれますが、ヤシの樹は高さ 30 メートルにもなり、この樹の葉は小さい時は傘やうちわに利用され、大きくなると屋根を葺くのに使われます。樹の材質は非常に強く、耐久性があり、建築材として柱や梁に使われます。

三月から五月ごろに花が咲き、この花柄（かへい）（花の小枝）の先端から採取した液は数時間経つと発酵してヤシ酒となります。また、この樹の液を煮詰めるとジャゲリという砂糖ができます。

このようにヤシの樹は生活に役立ついろいろの性質を持っています。

多くのお経はこのヤシの葉に書き写し、それを束にして保存されてきました。

漢字に訳されたお経

インドのお経は中国で国家的事業として紀元 2 世紀中ごろから 8 世紀ころまでの間に

数多く訳されました。

仏教のお経が初めて中国語で訳されたのは、一般には後漢の明帝の永平 10 年といわれます。金人（仏像）を夢見た明帝が使者を西方に遣わしてインドから迦葉摩騰（かしょうまつ）、竺法蘭（じくほうらん）などを連れてきて、洛陽の白馬寺で『四十二章経』などを翻訳させたのが永平 10 年であったといわれます。これが最古の中国語で訳されたお経といわれますが、たしかなことは解っていません。

現存する最古の中国語で訳されたお経は 2 世紀の中ごろ渡来した安世高（あんせいこう）や支婁迦讖（しるかせん）などが訳したお経です。前者は小乗仏教に属するお経を、後者は大乘仏教に属するお経を中心に翻訳しました。

まったく異なった性質の言語から訳す時に多くの困難があったようです。その表われとして漢文のお経にサンスクリット語から音訳した陀羅尼（だらに）、仏陀（ぶつだ）、般若（はんにゃ）、菩提（ぼだい）などのような用語が多く見られるのは、簡単に意識できない事情があったからです。

これについて釈道安（しゃくどうあん）という僧は五失三不易（ごしつさんふえき）といって、訳せば原意を失うものが五つあり、訳が容易でなかったものが三つあるといいました。唐の時代の玄奘という僧は五種不翻（ふほん）といって、サンスクリット語から訳す時に中国語で訳できない場合が五つあるといいました。

五失三不易はつぎのような例を挙げています。

五失として、

1、インド語とシナ語では語句の配列が逆になっている。

2、インド文は質実を尊ぶが、シナ人は美文を好むので、文章を飾った。

3、インド語では趣旨を徹底させる場合には、同一の文を数回繰り返すが、翻訳する場合には繰り返しを省略する。

4、サンスクリット文では千字以上に及ぶ長い注釈文を挿入するが、翻訳ではこの挿入文を省略することがあり、原典の意味が失わ

れることが多い。

5、サンスクリット文では一応説明したあとでもさらにそれを繰り返すことが多いが、翻訳ではこの反復をすべて除いている。

が挙げられています。

つぎに三不易として、

1、形式的にはサンスクリット語は優雅な古文であっても、翻訳する時には近代的な平凡な文章に移さなければならない。

2、内容的にはサンスクリット文ではむかしの微妙なことが述べられていても、翻訳では末代の世俗に合致するようにしなければならない。

3、かつての結集の時に慎重審議して編纂したお経を現代の人は軽率、無思慮に翻訳している。

と述べています。

玄奘の五種不翻訳は右と似ていますが、翻訳できない例を五つ挙げています。たとえば私たちが外国語の発音をそのままカタカナで表わしたり、意識して使ったりするのと同じです。カタカナで使うとしゃれた感じに受け取れたり、上品な感じになったりするように、サンスクリット語を意識するより、音訳するほうが意味が深く、奥行きがあるように受け取られるので、とくにブッダの秘密の教えを表わす言葉は音訳する傾向があったようです。

1、「秘密のゆえに。陀羅尼のごとし。」

お経のなかにはブッダの秘密の教えを伝える言葉があります。それを真言（しんごん）といいます。それは日常使っている言葉で表わすと真意を損ない、誤解される恐れがあるので、サンスクリット語の発音のままに音訳しなければならない言葉があるといいます。例えば陀羅尼がそうです。これは原語でダラニーといい、呪句、呪文という意味ですが、しかしこれはこの意味だけでは言い尽くせないで、音訳したのです。

有名な『般若心経』の末尾にある「ギャーティ、ギャーティ、……ボーゾワカ」という陀羅尼は意識するとさほど有り難みを感じられませんが、このように音訳すると秘密の意味が感じられるのです。だからこのように陀羅尼は秘密の意味を持っているので音

訳しました。

2、「多義を含むがゆえに、婆伽梵（ぼがぼん）が六義を具するがごとし。」

一つの言葉に多くの意味が込められている場合には音訳するとあります。例えば婆伽梵は原語でバガヴァンといい、一般には世尊と訳します。世間でもっとも尊敬を受けるに値する人という意味ですが、この言葉にはこれ以外に五つの意味を持っているので、一つ世尊だけで表せないのが、このような言葉の場合は音訳するという意味です。

3、「ここに無きがゆえに、閻浮樹（えんぶじゅ）のごとし。」

閻浮は原語でジャンブーといい、これを音訳したものです。この樹は中国にないので、意識しても中国人には理解できません。このような中国にないような物を表わす言葉は音訳するという意味です。

4、「古えに順ずるがゆえに、阿耨菩提（あのかほだい）のごとし。翻ずべからざるにあらざれども、摩騰（まとう）以来常に梵音（ぼんおん）を存す。」

お経が中国に伝わって、最初に翻訳された時から音訳されている原語は音訳するべきであるという意味です。前例に従うというわけです。例えば原語でアヌッタラサンボーディという語は従来「阿耨菩提」と音訳してきたので、それは継承するというのです。

5、「善を生ずるがゆえに、般若のごとし。」

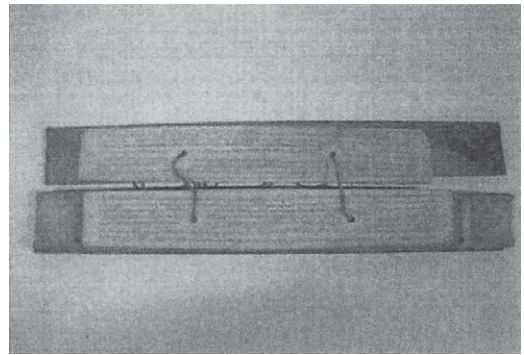
人々に善根を植えさせ、さらに善行を起こさせるような言葉、あるいは善を生むような言葉は音訳するという意味です。例えば原語のプラジュニャーは智慧という意味ですが、これは善を生ずる言葉であるから、あえて般若と音訳すべきだといっています。

上に紹介した二人が翻訳にあたっての注意事項を残していますが、インドの原語を中国語に翻訳した時に誤解を招くことがあっては釈尊の教えが正しく伝えられないことを恐れて、とくに玄奘が訳したお経の中には音訳語がかなり多く見られるようになりました。

音訳語が数多くあるために、今度はお経の内容がすぐに理解できなくなりました。音訳語は原語を知らないとそれだけでは意味不明です。したがって専門家の説明が必要となりました。このために一般人にとってお経がむずかしいものになってしまいました。

最初だれでも読めるようなお経が後の時代になってよほどの専門的知識を持たない限り読むことも、また理解することもできないようになったことは残念です。私たちは難しいお経ではなく、だれでも手にしてすぐに読め、そして解るお経が欲しいですね。

ご清聴ありがとうございました。



貝葉に書写されたシンハリ語の經典